

「老年腫瘍学テキストブック」第1回 編集委員会 議事録

日時 2021年3月16日(火) 18時～19時半 Web会議

出席者 石黒洋、海堀昌樹、唐澤久美子、杉本研、田村和夫、中山健夫、吉田好雄
佐々木瞳(オブザーバー)、生駒規子(事務局)

欠席者 重本和宏

資料に基づき議事次第に沿って議論が行われた。また、オブザーバーとして出版社の立場からの意見をいただくために金原出版の佐々木瞳氏に参加いただいた。

1. 編集委員会の構成

老年医学の基礎、臨床、腫瘍学から内科、外科、放射線科、社会医学各領域の研究者、教員から編集委員会が構成されている。

重本和宏、杉本 研、石黒 洋、吉田好雄、海堀昌樹、唐澤久美子、中山健夫

2. “老年腫瘍学テキストブック”作成にいたった経緯

厚生労働省科学研究 がん対策推進総合研究事業「高齢者がん診療指針策定に必要な基盤整備に関する研究」(2018～2020年度、研究代表 田村和夫)が過去3年間にわたり実施した事業報告があり、その一環として、指針策定にあたり基盤となる学問としての老年腫瘍学のテキストブック(以下、テキスト)を作成することになった。

これは、同研究事業「高齢者がん診療ガイドライン策定とその普及のための研究」(2021～2022年度、研究代表 佐伯俊昭)に2021年4月1日より引き継がれる。

3. 班員、高齢者がん医療協議会(コンソーシアム)委員の意見の紹介

田村班研究分担者ならびに高齢者がん医療協議会(コンソーシアム)委員の本件に関する意見のまとめを紹介し、学部学生向けのテキストは時期尚早であり、研修医・一般医を対象としたテキストを作成することになった。また医学部だけでなく看護学、薬学系学部の教員が学生教育に参照となるもの、入門書的なテキストが欲しいとの意見があった。

4. テキストのタイトル

高齢がん患者の診療にあたり疑問が出た時に参照できること、抵抗なく手にとってもらえるテキストのタイトルが望ましいので「実践」という言葉を入れる。次編集委員会までに各委員が検討する。

「わかりやすい 実践老年腫瘍学」「みんなのための 実践老年腫瘍学」

5. 編集委員長の選出

4. で紹介された意見の中で、将来医学教育コアカリキュラムの中に何らかの形で取り入れられることを念頭に、当面「共通教科書」に発展させる基盤となるテキストを目指す。したがって、医学部の科目責任者で、テュートリアル教育の導入をはじめ日本の医学教育をリードしてきた東京女子医科大学の学部長経験者、唐澤久美子教授を編集委員長として選任した。老年医学から杉本研教授を副編集委員長に選任した。

6. テキストの目標、対象、内容のレベル、章立て、項目立て

1) 到達目標：本テキストを参照することにより

- ・加齢による分子・細胞、臓器の変化を理解できる
 - ・加齢に伴う心身・社会・経済的な問題を評価できる
 - ・高齢者のがんならびにがん患者の病態生理を理解できる
- 含) カケキシー
- ・併存症・合併症治療が適正にできる。含) リハビリテーション、栄養療法
 - ・がんの予防、診断、治療（治療選択、治療の止め時）について説明できる
- 含) Clinical outcome（がん治療の目標）の設定
- ・必要に応じて関連するがん専門医や包括ケアセンター（介護・福祉サービス）を紹介できる。
 - ・医療経済（費用対効果、quality adjusted life year(QALY))を理解できる、
 - ・終末期医療（Quality of death、良い死に方、ACP）を説明できる。

2) 対象と内容

- ・対象：研修医、一般医
- ・内容：医学部、看護系、薬学系の学生教育において教員が参照できる内容とする。
メディカルスタッフも参照できる平易な内容とする。
- ・総ページ数：250-300 頁、手ごろな値段（3000 円前後）
理解しやすくするために図表を多く利用する

3) 章立て、項目立て

①各領域の編集委員により、章・項目立て、ならびに執筆者の選定を行う。

②記載する内容

- ・生理的な変化（加齢）
分子・細胞生物学的特徴
臓器形態・機能
個（心身）としての変化

- ・がんの特徴
 - 発生場所・形態
 - 分子・細胞生物学的特徴
- ・症状の特徴
- ・診断法（検査）の留意点
- ・治療に関しての留意点
 - 治療の目標設定
 - 多薬：薬物相互作用
 - 抗がん薬 PK/PD
 - 放射線生物学
 - 手術侵襲
 - 放射線治療
 - 支持・緩和医療
 - 抗がん治療の終了
- ・治療に対する反応性
 - 有害事象
 - 効果：治療の目標
- ・人生の質と治療
 - Quality of Life
 - Quality of Death (人生の終い方)
- ・社会・経済的：介護・福祉
 - ACP、ケアギバー
- ・日本の老年腫瘍学の教育・研修制度
 - (現在 6 施設に資料提出依頼中)
- ・フランス、米国の老年腫瘍学の教育・研修制度
 - 松岡歩 (国立がん研究センター)、西嶋智弘 (九州がんセンター)
- ・症例・事例提示
- ・法律：国民健康保険法、介護保険法
 - 健康増進法

③記載の順番：通常、基礎から臨床、そして終末期、社会・経済領域といった順に記載されることが考えられるが、テキストを手にとった研修医や一般医、教員が興味を持つよう、また、通常スキップしがちな領域を前の方に持っていく工夫をする。

7. 今後のスケジュール

以下、事情により（執筆の遅れがもっとも大きい）変更はあるが、現時点で目標とするタイム

スケジュールは以下のようである。

章立て・項目立て	2021年3～4月
執筆者の選定	5月
執筆期間	5月～7月
査読	8月
出版社引き渡し	9月
発刊	2022年正月

8. 今後の検討課題（第一回編集会議で議論されていないこと）

1) 出版社について

これまで現研究班で作成した「高齢者がん医療 Q&A 臓器別編」や支持・緩和医療関連の本を手掛けている金原出版の佐々木瞳氏に本編集委員会に参加いただいたが、本テキストが金原出版から発刊されることが決定しているわけではない。

章・項目立ての概要が決定し、執筆者の選定が行われる頃に複数の出版社に計画を提示し、出版社の意向、条件、スケジュール等を編集委員会が検討したうえで出版社を決定する。

2) 2021年4月1日、佐伯班が発足以降の体制について

「高齢者がん診療ガイドライン策定とその普及のための研究」が4月1日より開始される。下図のような体制で計画に基づき研究が行われる。研究計画は、

「①ガイドライン（GL）作成委員会を設置し、「高齢者がん医療協議会」、日本がんサポーターシップケア学会と協働でがん種共通の GL を作成する。②HP、SNS を利用し GL の普及を図る。評価委員会を設置し GL の有用性を検証する体制を構築する。がん診療連携拠点病院と研修会を開催する。③未解決の臨床課題を臨床研究により GL に耐えるエビデンスにする。④介護と医療情報（DPC 等）を集積・解析し、両者の連携のあり方を検討する。⑤本研究、研修会を通して人材育成をはかり、老年腫瘍学のテキストを作成する。」

であり、本編集委員会は⑤を担当することになる。

本事業は、前研究班と同様の体制で、佐伯班と高齢者がん医療協議会（コンソーシアム）、日本がんサポーターシップケア学会の3者が協働で進めることになる。NPO 臨床血液・腫瘍研究会は、研究推進のための事務局をつとめる。

「高齢者がん診療ガイドライン策定とその普及のための研究」2021-2022 研究体制

